

【決算説明会質疑録】平成 24 年 12 月期 第 2 四半期決算発表について

<日時> 2012 年 8 月 3 日 17:00-18:30

<登壇者> 代表取締役社長 三宅占二、取締役 鈴木政士

以下、KB:キリンビール、KBC:キリンビバレッジ

1. 第 2 四半期決算について：

Q.今第 2 四半期決算まで豪州事業とブラジル事業はともに計画通りという説明があった。その背景と足元の動向を踏まえた今後の見通しを教えてください。

(三宅社長) 豪州のライオン社は既に第 3 四半期まで終わり、年間計画は十分に達成可能な水準だと考えている。飲料事業のトップラインは厳しいが、費用のコントロールが上手くいっていることに加え、酒類事業も好調である。酒類事業については、インターナショナルプレミアムブランドなどが新たにブランドポートフォリオに加わり、来期以降は、売上、利益にもポジティブに働くようになるものと考えている。飲料事業は引き続き事業構造改革を進めていく。ホワイتمilkの低価格化など厳しい市場環境は続くが、一方で来期以降、生産拠点の最適化の効果が大きく出てくる見込み。次の 3 年間は分かりやすいポジティブな絵が描けると思う。ブラジルのスキンカリオールについても、調達プロセスの抜本的改善などでの PMI 活動の効果もあり、今期 EBITDA 計画の 550 百万ブラジルレアル (以下、MBRL) は達成できるものと考えている。

Q.ブラジル事業について。今期 EBITDA 目標の対前年+150MBRL のうち、80MBRL は調達等を含めたコスト削減であると年初に説明された。それに対する進捗と今後の見通しを教えてください。

(経営戦略部担当長) 現在、調達の抜本的改善に向けた PMI 活動が前倒しで進んでいる。下半期に期待していた効果が一部前倒しで発現しているが、対米ドルでのブラジルレアル安による原材料コスト高の影響があるため、年間でのコスト削減効果の見通しは変えていない。

Q.豪州とブラジル事業は計画通りとのことだが、国内総合飲料事業の下方修正の背景を理解したい。

(三宅社長) 7 月のビール市場全体の販売は弱く、足元の状況を勘案し大変残念だが下方修正した。修正した以上は、ボトムラインはしっかりコミットしていきたい。

Q.KB について。上半期の販売費増は下期に効果が出てくるのか。

(三宅社長) マーケティングコストの投資先であるブランドの分散を避け、基盤ブランドを中心に強化していく方針自体は間違っていない。KB では「キリン一番搾り生ビール」の販売トレンドも好調であり、「キリン のどごし<生>」もリニューアル後、POS データでは明らかな改善傾向が見られる。上半期に使ったマーケティングコストは必ず下半期の販売に生きてくる。下半期も KB、KBC で基盤ブランド成長に必要な投資と活動は継続していく。

2. 次期中期経営計画 (以下、次期中計) について：

Q.次期中計に対する現時点での考え方を教えてください。

(三宅社長) 現在検討中であり発表までお待ちいただきたい。次期中計は長期経営構想「キリン・グループ・ビジョン 2015」のクロージングの 3 年であると同時に、次の長期計画に取り組む第一

歩の中計という位置付けになる。国内総合飲料の課題にどのように応え再成長のシナリオを描くのか、海外事業をどのように進めるかがポイントになるだろう。それらを踏まえて秋頃に発表したい。

Q.次の三年間の国内総合飲料の成長余地について教えてほしい。

（三宅社長）新提案や商品開発力の強化は大きな課題だが、発売以降大ヒットしている「キリンメッツ コーラ」のような商品が毎年容易に出てくるものではない。国内総合飲料新会社設立後の新体制下で、短期的・中期的に取り組む課題を分けて考えたい。今後3年間で見込まれる成長は次期中計発表までお待ちいただきたい。

Q.来期の財務戦略の考え方を教えてほしい。

（鈴木取締役）今期については年初の方針どおり、キャッシュフローの使途として有利子負債の返済を重視してDEレシオ1倍に近付けたい。来期の財務戦略についての詳細は次期中期経営計画の中で明らかにしたいが、指標については、株主価値の向上という観点を組入れた上で、事業戦略と組み合わせて財務柔軟性をもてるようにしたい。DEレシオの数値は結果であることから、事業戦略と組み合わせて考えたい。

以上